



TITLE:

<學界展望>女眞社會史をめぐる諸問題

AUTHOR(S):

松浦, 茂

CITATION:

松浦, 茂. <學界展望>女眞社會史をめぐる諸問題. 東洋史研究 1977, 35(4): 682-693

ISSUE DATE:

1977-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153642>

RIGHT:

學界展望

女眞社會史研究をめぐる諸問題

松 浦 茂

い、いわゆる満洲史研究（これは、小論で言う女眞史よりも廣い範圍の問題を含む）は、かつて、我國の東洋史學の中にあつて、最も主要な研究分野の一つであつた。事實、満洲史研究は、東洋史學の草創期にあたり、數々の業績を生み、東洋史學が近代的な學問としての地位を確立していくために、すぐれた貢獻をしたと言える。しかし、このような満洲史研究も、今日大きなまがりかどにさしかかっている。

我國において、かつての満洲、現在の中國東北地區の民族や、その歴史、言語等に關する研究が始まつたのは、古く江戸時代初期にまでさかのぼる。しかし、近代的な學問として、その歴史研究が成立し發展するのは、明治以降、特に、日露戰爭後、大陸への軍事的進出が激しくなつてからである。それ以後の戦前の満洲史研究は、中核となつた研究機關や組織、そして研究の大體の傾向から、二つの時期に劃することができる。第一期は、日露戰爭後に満洲經營が始まつてから満洲事變がおこるまでの期間である。この時期の一

つの中心は、滿鐵の東京支社に設けられた調査部において（後に東京帝國大學に移つた）、白鳥庫吉氏を代表に、筋内互、松井等、稻葉岩吉、池内宏、津田左右吉そして和田清の諸氏により推進された研究事業である。その成果は、『満洲歴史地理』二冊（一九二三）、『滿鮮地理歴史研究報告』一六冊（一九一五—四一）となつてあらわれたが、表題からもわかるように、これらの研究は、主に、歴史地理の方面、とりわけ比較的古い時代の地名比定、交通路や領域の推定等に集中している。

これに對して、内藤湖南氏は、『滿文老檔』、『五體清文鑑』等の基礎史料を奉天から將來される一方、新出の基礎史料をもとに、博識を駆使した事實考證を展開された。

その外、渤海史の研究に貢獻された鳥山喜一氏も忘れることができない。以上のような人々の努力によって、將來の研究發展のための基礎が固められたのである。

續く第二期は、満洲事變以後敗戦までの期間である。この時期には、外務省文化事業部の助成により、滿蒙文化研究事業が東京と京都で始まつた。前者では、池内氏のもとで、三上次男、旗田巍兩氏が、後者においては、羽田亨氏のもとで、田村實造、若城久治郎、小川裕人、外山軍治、今西春秋、三田村泰助らの諸氏がこの研究事業に従い、その成果は多くの論文となつて、『滿蒙史論叢』等の學術雜誌に發表されている。中でも、三上氏の論著『金代女眞の研究』（一九三七）は、女眞史研究における最高の到達點を示すものとして注目される。この外、現地で、園田一龜、島田好らの諸氏が研究活動を行なわれている。

この時期の研究にみえる著しい特色は、女眞の社會構成に關する

考察が盛んになったことである。それまでに、當該地域において、慣行調査が行なわれ、或いは、ウラジミールツォフ E. Я. Брандмюль氏ら外國人の社會組織や法律關係の著作が紹介されて、ようやく社會史方面への關心がもたらがってきたが、特に、『歷史學研究』の特輯號として『滿洲史研究』（五一—一九三五）が刊行されたことが、このような傾向に決定的影響を及ぼした。この時期の社會史的な研究は、限界をもちながらも、かなりの成果を擧げることができた。

またこれと並んで、第二期の研究には、さらに別の顯著な傾向がみられる。それは、女眞に限らず、北方諸民族が中國にたてた王朝について、彼らがいかに漢民族を統治したかという視點から、その政治機構、軍事制度、外交關係、宗教對策等の性格を研究するものであった。とりわけ各王朝の制度面における二重構造の問題が検討された。

以上のように、戦前の研究においては、例えば歴史地理や社會上の顯著な現象等、特定の問題に關する研究が、非常な發達を遂げたのである。こうした研究は、當時可能な限りの史料を使用しており、内容的にも完成度が高いと言えよう。しかし、一步それから外へ踏み出せば、意外に多くの分野が、空白のまま残されていることも事實である。特に、慣行や習俗といった、各民族の社會や文化において最も基礎的な問題が、例外的な場合を除いて、はつきりと研究者の視野の中におかれていたとは言いがたい。そのことが、戦前の研究に、一つの限界を與えているのである。

戦前の活潑な研究が、現實の政治勢に刺激された精神的狀況に負うところが大きいのに對して、戦後の沈滞した研究狀況の底流

に、戦後、それが崩壊してしまつた影響があることは否めない。

特に、戦後まもなく、今までの研究活動の基盤であつた各種機關や研究所が解體しただけにとどまらず、多くの研究者が研究から離れるという深刻な狀況がおこつた。こうした中で、戦前から活躍されている學者によつてその業績が著書にまとめられて世に問われる一方、戦前既に完成されていた『明代滿蒙史料 李朝實錄抄』一五冊と同じく『明實錄抄』一八冊が、昭和二年から三四年にかけて刊行された。さらに、神田信夫・松村潤らの諸氏の手で、『滿文老檔』七冊（東京、一九五五—六三）の全譯が完成した。これは、鴛淵一、今西、三田村の諸氏、中でも今西氏『滿和對譯滿洲實錄』（一九三八）により基礎を固められた我國における滿文史料の研究に、新しい一步をしるした戦後のすぐれた業績の一つである。このようにして、史料研究の面においては、再び着實な歩みが始まつている。しかし、目を轉じて、個々の研究論文についてみると、それらの中には詳細でかつ正確な事實が多く明らかにされているにもかかわらず、戦後における新しい創造的な研究方向は、まだ十分に具體化されていまいと言えよう。

現在のこのような研究狀況を克服するためのものとして、或いは史（資）料的な條件があげられるかもしれない。確かに、從來の漢文史料に加えて、相當な量の滿文史料や、考古學・民俗學等、鄰接諸科學の最近における成果が容易に利用できるようになり、その點では、有利な狀況が生まれている。恐らく、これらの新しい史料を使つて從來とは異なる研究が生れるであらう。しかし、史料批判の本質が、それを通して問題を一步ずつ現實化していく過程である以上、それを一層積極的に評價するためには、明確な研究方向をもつ

ことが絶対に不可欠である。その意味で、今日の状況は、史料面の好條件を存分に利用すると共に、より根本的には、學問自體の中でつき破らねばならない。

いわゆる満洲史は、女眞だけでなく、契丹等の歴史も含むように、むしろ地域に重點のある表現であって、一つの獨立した歴史の存在を示すものではない。今後は、北アジア史と呼ばれる研究領域が一般にそうであるように、その民族的、そして獨特の地域的條件の中ではぐくまれた独自の社會や文化の総合的な考察の上に、一貫した女眞史を構築していくことが、重要な課題となろう。

以下、女眞社會史研究をめぐる主要な問題點について、私なりに検討を加えてみたい。

二

戦後まもなく、戦前の研究に對する反省として、我國の研究者の間で、北アジア地域の諸民族の歴史について、世界史に占める獨自の地位を認め、その一貫した歴史的過程を追求することが、共通の課題として認識されるようになった。それは、山田信夫氏が正しく指摘されているように、それまでの漢民族との交渉關係を中心とした歴史の研究から、その前提であるはずの、彼らが自ら創造した歴史の研究への轉換を志向するものである。我々もまた、一つの歴史的過程としての女眞史が自立するための基盤を、ここで改めて考察しておく必要がある。

北アジア地域の諸民族の歴史的發展に關する問題に、先驅的な業績をあげられているのは田村實造氏である。氏は、中國を中心とする東アジア歴史世界に對して、北アジア歴史世界の獨立を認めら

れ、遊牧國家と征服王朝という二つの國家類型に基づく北アジア世界の時代區分を試みておられる。氏の構想は、その後、多くの研究者によつて検討された。その結果、遊牧民諸國家の發展過程としては、ほぼ基本的に承認を受けたが、一方、女眞系の金と清とを征服王朝の中に加えることに對しては、大體否定的に考えられていると言えよう。それらの諸見解の繰返しになってしまうけれども、氏の問題提起に對して、最近における考古學の成果によりながら、問題を整理して、女眞史の位置附けを考えてみたい。

氏の北アジア諸民族の歴史的發展に關する基本的な構想は、既に早く、「東方史の構造と展開」(『史林』三三—、一九四八)の中にあらわれている。それは、明らかに、從來の交渉中心の歴史を一步進めて、中國北方の諸民族の歴史世界を認め、その構造を考える方向をもっている。ただ、この論文の主題は、歴史的現象としてあらわれた、北方世界と南方世界との相互關係の變遷を通して、南北兩世界が構成する東方史の展開を明らかにすることであつたから、北方世界内部の發展についての關心は前面に出ていなかった。

しかし、以後に、北方世界内部の歴史的發展についての課題が具體化されていき、最後に、「北アジアにおける歴史世界の形成」(『東方文化講座』一〇、一九五六、後同氏『中國征服王朝の研究上』に補訂再録、京都、一九六四)で、その時代區分が完成した。これを促す契機となつたものは、ウィットフォーゲル K. A. Wittfogel 氏が『中國社會史—遼(九〇七—一二二五)』で展開した征服王朝論であつたと言えよう。しかし、その際に、北アジア地域の諸民族の歴史的發展という關心に沿って、問題が整理しなおされなかつたために、論理的に不整合な部分ができたと考えられる。

この論文では、かつての術語に代わって、新しく、北アジア世界、東アジア世界、そして北アジア歴史世界という術語が使われている。以下、氏の主張をまとめてみよう。

東アジア世界の北に接する北アジア世界は、既に先史時代から、前者とは本質的に異なる文化圏を形成していた。そして、紀元前三世紀末の匈奴の建國以來、そこには獨自の北アジア歴史世界が成立した。北アジアに興った匈奴、鮮卑、柔然、突厥、ウイグル、遼、金、元、清の諸國家は、歴史的 성격によって、匈奴からウイグルまでの遊牧國家と、遼以後の征服王朝の二類型に大別できる。最初の遊牧國家は、北アジア世界だけを活動舞臺にした部族連合體的國家であり、單于（或いは可汗）を頂點とする内部の政治機構は、特權的な單于の氏族とその外戚氏族が獨占した。このうち、ウイグルは、政治面でも社會面でも、一層發達した段階を示す。これに對して、征服王朝は、次のような過程を経験する。初め、各々の小勢力にわかれて中國や朝鮮の邊境地域に侵入し、農民の俘掠を繰返していたが、その中からしだいに一人の可汗の權力が確立していき、ついに可汗のもとに、農耕民と遊牧民または狩獵民とからなる牧農的政權ができる。そして可汗は、それまでの部族制を廢止して、封建的關係に立つ新しい組織を造る。この頃に北アジア世界の統一が完成する。ところが、農耕民の生産力によって國力は増すが、そのために一方で階級分化も進む。そこで中國に對して征服戰爭をいどみ、その結果、中國と北アジアを支配する征服王朝が出現する。その社會は、遊牧・狩獵社會と農耕社會との複合制になる。これは、北アジア世界における古代から中世への發展を意味する。以上である。

右の田村氏の構想に對して、村上正二氏は、征服王朝の中に、モンゴル系の遼と元と並んで女眞系の金と清とを含むことについて疑問を出されている。⑩ 前者が遊牧民の國家であるのに對して、後者は、（表現は各々異なるが）農耕民の國家であり、性格が違ふというのである。結論的になるが、田村氏の言われる北アジア歴史世界という概念は、それ自身全體が一つの歴史をもつ世界を示すのか、或いは、そのような世界が幾つか集まってできた全體世界を表わすのか、氏の構想でははっきりしていないように思う。というのは、その一部に、金と清が位置附けられているにもかかわらず、もしそうならば當然あげられなければならない同じツングース系の高句麗や渤海の位置附けが全然ないからである。ところが、その後の考古學の業績によると、高句麗と渤海、そして金代女眞社會の間には、幾つかの點において文化の近縁性と連續性があることが認められる。そうした知識の量はまだ本當に限られており、今後一層の充實が待たれるが、しかし、例えば、この地域の住居において、古來發達してきた土間床と、その上に設けられた炕の構造は、三者の間で基本的に一致するのである。さらに、彼らの社會が、西方に鄰接する遊牧民社會とは、文化的にも、そして、一時期を除いては政治的にもはっきりと區別されていたことを考えあわせると、女眞社會の歴史的發展の問題も、この系列の中においてしか考えられないのである。

この認識に立つとき、それでは、金と清とを征服王朝として位置附けることは、女眞史全體においていかなる意味をもつであろうか。最初に征服王朝という術語を使用したのは、ウィットフォード氏であるが、彼自身が言うように、それは中國史のための概念であった。

すなわち、秦以後の中國帝國を構成する二つの範疇の一つとして、征服王朝（及び浸透王朝）（3北魏とその前後の異民族王朝、6遼、7、金、8元10清）は、典型的中國王朝（1秦・漢、2分裂期の中國王朝、4隋・唐、5宋、9明）を補充するものであった。周知のように、ウィットフォール氏は、戦前には、中國史の右の時期を東洋的社會と規定し、紀元前二二一年の秦成立以前の（早期）封建社會と區分している^⑩。東洋的社會においては、水の規制が不可欠であるため、封建的ヒエラルヒーは生まれず、官僚的、僧侶的階級が唯一の支配者であった。そして、様々な原因により、國內的危機に瀕しても、外壓のない限り、治水事業の必要から、王朝交替によって、いつでも同じ國家秩序が再建されたという。この段階までは、彼は中國に異民族王朝が出現するのは、國內の農業危機による必然の結果であつて、彼らはすみやかに漢民族に同化されたと考えていた。ところが、戦後、ウィットフォール氏は自らの立場を轉換する。

そして水利という契機を一層重要視するようになり、術語も大幅に改め、東洋的社會も複合治水社會と變えてしまう。戦後の早い時期に、従來の同化説を批判するために展開した征服王朝論も、當時のこうした事情と切離しては考えられないのである。戦前の停滯論もそうなのだが、特に、戦後の中國史に對する氏の理解に、重大な問題があることは言うまでもない。しかし、それは、中國史の専門家によって、學說史の中で詳細に検討されるであろうから、これ以上ここで立入る必要はない。ただ、忘れてはならないのは、ウィットフォール氏の征服王朝論は、結局、前述したように、秦以後二千年間の中國社會（正確には漢民族社會と言うべきだろう）を同質のものとする理解を前提として、征服王朝下では、征服者である異民

族の社會は、漢民族に同化されずにそのまま存続し、典型的中國王朝下よりも複雑な階級構成が生まれたことを主張するもので、征服王朝下のそのような社會を、歴史的発展として位置附ける視點はないということである。

これに對して、田村氏も同じ征服王朝という術語を使われるが、ウィットフォール氏とは、全く別の立場からである。田村氏の場合には、征服王朝とは、北アジア世界の發展過程で出現した國家であつて、その政治的な過程や國家構造に類似性があるため、そこに同一の歴史的段階を認められるのである。明確に定義されているのであるから、田村氏が獨自の立場で、征服王朝という術語を使われることはさしつかえないと思う。ところで、氏の述べられる征服王朝に特有の事實が、金や清の間にどれ程共通するのかということは、一概に論じることができないけれども、當面、もつと本質的な問題は、牧農的政權や複合制という征服王朝の政治、社會構造は、果して、社會の發展段階と直接的な因果關係にあるかどうかということである。これに對しては、疑問を感じざるをえない。というのは、このような事實は、必ずしも、社會の特定の發展段階にだけ關係するとは言えないからである。

こうして、金と清の歴史的段階を示すものは、田村氏が、君主との封建的關係に基づいて組織されたと考えておられる猛安謀克や八旗制の存在だけになつてしまふ。これら兩制度の歴史的 성격については、今後の詳細な研究をまたねばならないが、これからもわかるように、結局、女眞史の展開は、女眞社會自體、すなわち社會的關係に基づいて考察されねばならないのである。ここに、我々の今後の課題があると言えよう。

根強い先入見に對して、北アジア地域の諸民族の歴史の獨自性を主張された田村氏の構想は、大きな意義をもつ。その中に、現在では實狀にあわなない箇所があらわれているとしても、先驅的な試みとしてやむをえないと思う。今後、我々は、氏の問題提起をうけて各々の専攻領域で、個別的、具體的な歴史を構築していかねばならぬだろう。

以下、この視點から、女眞の社會構成に關する研究について、その成果と、これからの課題を述べてみたい。

三

女眞族の社會構成をめぐって、最も自覺的に研究が進められているのは、明末清初の時期の女眞社會についてである。このような研究傾向に決定的な影響を与えたのは、前述の「滿洲史研究」の諸論文、中でも、中山八郎氏「明末女直と八旗的統制に關する素描」と旗田氏「吾都里族の部落構成——史料の紹介を中心として——」の兩論文であった。それ以前には、滿洲族の還元性という持論をもたれる稻葉氏が、當該時期の女眞社會は、金初と同じく、なお氏族制に停滞していたと主張されていた。これに對して、右の二論文は、この時期には既に、氏族制度は崩壞過程にあったという認識に立っていた。特に後者は、李朝實錄に記録されていた十五世紀の圖們江流域における女眞集落の幾つかについて人口構成を分析したものであるが、それによると、彼らの集落は、異なる複数の姓をもつ人々から構成されており、しかも同姓と言っても必ずしも同族とは限らなかった。また、時には、同じ集落内の二つの家系が婚姻關係を結ぶこともあり、さらに、貧富の差も相當にはつきりしていたという。以

上の理由から、旗田氏は、吾都里族では、氏族制は崩壞していたと結論された。氏の右の分析によれば、男系出自の氏族制度が、當時の段階まで機能していたとは考えられないから、従って、氏の結論は首肯できる。明末の女眞社會に對する旗田氏らの規定は、以後の戦前の研究において定説化した。特に、三田村氏「滿洲國成立過程の一考察」(『東洋史研究』二二、一九三六、後同氏「清朝前史の研究」所收、京都、一九六五)、鴛淵一・戸田茂喜兩氏共著「ジュセンの一考察」(『東洋史研究』五一、一九三九)等が、その上に立って自説を展開したものである。

こうした成果をふまえて、氏族制度に代わる新しい社會構成の基礎となつた生産關係の研究が、次の段階における課題となつた。周藤吉之氏「清代滿洲土地政策の研究」(東京、一九四四)や、戦後の田中克己氏「清初の奴隸」(『帝塚山學院短期大學研究年報』四、一九五六)によつて、清初、盛んに奴隸が農業に使役されたことが知られているが、一方で、李朝世宗年間(一五世紀)に、多數の漢人奴隸が女眞のもとから逃亡して明に送り返された事實が注目され、彼らによる奴隸制生産が、この時期に出現したのではないかと推測された。しかし、戦後、河内良弘氏が、「建州女直社會構造の一考察」(『明代滿蒙史研究』、京都、一九六三)において、この考えを明快に批判されて、彼らが掠奪された奴隸であつたという證據はなく、これだけで、漢人奴隸による農業生産が、下級社會をもまきこむまで普遍化していたとすることは疑問であるとされた。傾聴すべき説である。

安部健夫氏「八旗滿洲ニルの研究(1)、(2)、(3)」(『東亞人文學報』一一四、二二、共一九四二、『東方學報』京都、二〇、一九五

一、後同氏『清代史の研究』所收、東京、一九七一）は、獨自の立場から、明末清初の女眞社會を考察したもので、それまでの學說を大膽に批判した、戦前の注目すべき論文の一つであろう。實際、戦後の研究の多くが、この研究を踏臺にしているのであるが、阿南惟敬氏『清初の甲士の身分について』（『歴史教育』一〇—一、一九六二）、三田村氏『ムクン・タタン制の研究—滿洲社會の基礎的構造としての—』（『明代滿蒙史研究』と『立命館文學』二二三、一九六四、後同氏前掲書所收）そして石橋秀雄氏『清初のイルゲン（Irigen）—特に天命期を中心として—』（『日本女子大學紀要』一三、一九六四）、同氏『清初のジュシユン（Juseun）—特に天命期までを中心として—』（『史艸』五、一九六四）等において、安部氏の研究に幾つかの難點があることがしだいに明らかにされている。氏は、當時の女眞社會が、汗を頂點としてペイレ、ペイセ等からなる官僚層、次に、甲士を中心とした自由民層、それからジュセシと呼ばれる隸農層、最後にアハなる奴僕層というように、四つの身分階層で構成されていたと考えられているのだが、しかし自由民層の下に、隸農層という一つの獨立した身分階層が存在したという考えは、現在では、大體否定されたとと言える。安部氏の隸農層という概念は、論理構成の前提であるから、その影響は、全體の論旨にまで及ばざるをえないが、それでも、氏の大部な研究は、その中に様々な問題を含んでおり、今後もそれらを批判的に再構成する必要がある。

以上のように、早くも戦前において、數多くの成果がもたらされたのである。この中であつて、戦前戦後を通じて、明末の女眞社會史の研究にすぐれた貢獻をされているのは三田村氏である。氏は、最近、この時期の女眞社會が氏族制社會であつたという考えに傾い

ておられるようである。ただ、氏の言われる氏族制度の概念については、まだ議論の餘地があるように思う。

三田村氏のいずれの論文をとつても、構成の基礎となるのは、ムクンの概念である。女眞本來の氏族組織であるハラは、大きくなりすぎて、現實の社會機能が果せないために、ハラから分化したムクンが、代わつてその機能を果した。ムクンは、地域關係を基礎にした血縁團體だという。三田村氏の前記『ムクン・タタン制の研究』によると、ムクンもしくはその下位單位である一集落の構成員は、女眞社會を規制する本質的要素であつて、生業である狩獵採參を行なう單位であるばかりでなく、またそのための土地を占有する主體であり、さらにそこから得たものを分配する組織でもあつた。ムクンとその下位單位の間には統屬關係が存在し、それを基礎にして、ムクン内の體制はそのまま、一層大きな軍事組織、そして窮極的には、グルンの政治機構にまで適用される。だから、グルンは、領主氏族を中心とした氏族連合體であつたという。

氏の戦前の前掲論文においては、グルンの汗やペイレを氏族制度との關連でいかに位置付けるかという問題が、未解決のまま残されていたのであるが、ここで新しく、氏族連合體の長と規定されたわけである。しかし、この説明に對しては、また別の問題が生じてくるように思う。氏の言われる領主氏族を中心とする氏族連合體という體制の中では、それを構成する氏族相互の間には、いかなる關係が存在するのか、例えば、それは、同一部族内における氏族間にみられる外婚規制のようなものかということである。三田村氏は、旗田氏等の氏族制度の存在を否定する見解に對して、ほとんどふれられていないのであるが、その點と共に、右の問題について、今後

の課題があると思う。

この外、戦時中から戦後にかけての、明末の女眞社會に關する論考としては、以下のものがある。まず、江島壽雄氏「明末滿洲に於けるガシヤンの諸形態」(『史淵』三二、一九四四)は、女眞の集落をその形態に基づいて類型化したものである。神田氏「清初の貝勒について」(『東洋學報』四〇—四、一九五八)は、清初のベイレについて追究したものである。河内氏には、前出論文と共に、女眞社會では農業が主要な産業となっていたことを主張した「建州女直の移動問題」(『東洋史研究』一九二、一九六〇)があり、石橋氏は前掲論文や、「清初のアハ(Altai)——特に天命期を中心として」(『史苑』二八—二、一九六八)等の一連の論文において、女眞社會の重要な概念を検討されている。これらの研究は、いずれも史料の扱い方が丁寧で説得力をもっている。今後の課題は、これらの研究を學說の中でどのように位置附け、それによって、いかなる具體的な歴史像を構築されるのかということになると思う。

四

最後に、私自身の研究領域である金代女眞の社會構成について、特に華北に移住する前のそれに關して、今後、とりくむべき課題を具體的に述べてみたい。

金代女眞史の研究において、大きな足跡をしるされているのは三上氏である。社會、政治、文化等あらゆる方面にわたる、氏の體系的な研究は、我々にとって貴重な財産である。その中には、また、將來發展させなければならない方向が、氏によって鋭く洞察されていることも少なくない。ここでも當然、氏の理解から出發しなければ

ならない。

三上氏は、「遼末に於ける金室完顔家の通婚形態」(『東洋學報』二七—四、一九四〇、後同氏「金史研究三」所收、東京、一九七三)で、遼末金初における金の帝室完顔家の婚姻の實例を、一例ごとに綿密に調査されて、その結果から、建國前の女眞社會の政治的狀況について、次のように考察された。

當時、諸部(三上氏によれば、完顔、徒單等の名稱をもつ集團全體)は、多くの氏(諸部の下位單位)に分かれ、各々が一單位となつて、各地域に散らばつて住んでいた。ところが、金室完顔家と通婚關係にあつたのは、そのうち特定の數氏で、しかも金室の本據地である阿什河近郊の家系に限られていた。しかし、反面、地域的、政治的關係に基づいて婚姻が結ばれることもあつた。ひるがえつて、女眞の祖先とされる靺鞨族の部族的結合は、數世紀後の遼末には既に解體し、かつて同一地域によつていた諸族も各地域に散らばつてしまつた。その結果、各地域に、例えば、有名な三十部女眞のような政治ブロックができた。しかし、その際には、かつて族内婚制度で結ばれていた諸部族集團が、結合の基礎となつた。金室もそのような一つの政治ブロックの盟主である。以上である。

遼末の女眞社會に、幾つかの地域的な政治勢力が成長していったという結論は妥當なものだと思う。しかし、その結合は、かつての氏族關係を基礎にしたというよりも、むしろ主として、政治的支配關係に基づいていたのではないだろうか。というのは、確かに金室の婚姻は、選擇された特定の家系との間だけで結ばれているが、一般の婚姻は、異姓同志であれば許されたと推測できるからである。従つて、金室の婚姻の實態を通して推定された三上氏の言われる族内

婚（嚴密には、それは、外婚規制に従う特定の數氏族からなる部族内部でのそれら相互の婚姻のことであろう）に従う部族組織の構成についても修正の餘地がある。この論文は、女眞の氏族制度の全體構造が明確になった段階で、實際の婚姻が、それからどの位規制されていたのか知るための有益な資料となるであろう。

それでは、その全體構造はいかなる形態であつたであろうか。史料の寡少等が原因で、殘念ながら、それを扱つた研究はない。それでも、まだ検討すべき方向は殘されている。

まず、氏族相互の關係については、全氏族名が網羅されている金史百官志の記載に注目する必要がある。それから、氏族組織の内部構造を追求するためには、金史の卷頭を飾る世紀中に記録されている完顔氏の始祖説話を再評價しなければならないと考える。

後者については、早く、池内宏氏が、「金史世紀の研究」（『滿鮮地理歴史研究報告』一一、一九二六、後同氏『滿鮮史研究』中世第一冊）所收、東京、一九三三）において鋭い批判を加えられて、始祖から始祖までの五代の人物に關する所傳は、歴史的事實とは考えられず、全く架空の物語で、従つて、彼らは、相承を永くみせるために加えられた、實在しない人物であると論斷された。これ以後の研究は、小川氏「三十部女眞に就いて」（『東洋學報』二四—四、一九三七）を除いて、田坂興道氏「完顔氏の三祖傳説に就いて」（『歴史學研究』八一—六、一九三八）も、三上氏「金室完顔氏の始祖説話について」（『史學雜誌』五二—一一、一九四一、後同氏前掲書所收）も、基本的には池内氏の結論を繼承する方向で、始祖説話がいついかなる目的で造られたのかという點について、一層合理的な説明をしようと試みられた。その結果、色々と貴重な事實が掘り起こされ

たのだが、それにもかかわらず、三祖型式が完成するまでの経過とその理由に關して、説得力をもつた説明がなされていないと思う。すなわち、始祖説話が、建國のかなり以前から、別々に傳承されていた可能性が否定しきれないからである。池内氏の結論は、動かせないが、その上に立つて、今後我々が發展しなければならぬ方向は、むしろ、從來無視されてきた、そのような始祖説話もついていた社會的側面つまりそれが社會において存在價值をもち、眞實として信じられていくことの社會的な意味を考察することである。

三田村氏「清朝の開國傳説とその世系に就いて」（『立命館創立五十周年記念論文集 文學篇』京都、一九五一、後同氏前掲書所收）と「明末清初の滿洲氏族とその源流」（『東洋史研究』一九—二、一九六〇、同右）とは、清朝の世系と女眞の姓を扱つた勞作であるが、これによつて、金代の女眞においては、後の時代と比較して、はるかに姓というものの意味が重く、また氏族の始祖名がはっきりと記録に残っている事實が明らかにになる。特に後者については、氏族成員間の諸關係が、共通の祖先から出自したという認識に由來する點から考えると、當時の社會では、氏族的な諸關係がかなり強かつたことが推測できる。しかし、そうした法的な關係は、氏族制度が機能を果さなくなった後も、當然、新しい共同體や家族制度に、形を變えて繼承されるわけで、これだけでは、氏族制度が存在したという證據にはならないのである。

三上氏「金初の字董に就て」（『稻葉博士還曆記念滿鮮史論叢』京城、一九三八、後同氏『金史研究』一）所收、東京、一九七二）によると、氏族（氏では部族）の内部は、各々幾つかの下位單位に分かれ、史料では部長と譯される字董が、その長であつたという。史料

の性格から、この下位單位の實態さえもまだはつきりしないのであるが、李董の歴史的性格を考察する上で、各地域の政治勢力内部での李董と上級の權力との關係もあわせて注目すべきであろう。

以上のような作業を通じて得られた金代女眞の社會構成に關する一應の見通しは、彼ら相互の社會關係、とりわけ生産關係の面で具體的に檢證されなければならない。三上氏「金代中期に於ける猛安謀克戸(1)、(2)」(『史學雜誌』四八・九、一〇、一九三七、後同氏前掲書三所收)や外山氏「金代に於ける黄河の氾濫と土地問題」(『東洋史研究』六一・一、一九四〇、後同氏「金朝史研究」所收、京都、一九六四)に指摘されているように、華北移住後においては、猛安謀克戸に關する土地問題が金朝の最も重要な課題となつた。そのことは、當時の女眞社會にあって、農業が主要な生産であつたことを端的に物語っている。彼らの農業生産の形態については、三上氏前掲「金代女眞の研究」の中に、氏のすぐれた見解がみえる。それは主に、金中期以降の狀態について述べられたものであるが、金初についても、基本的には該當する。次のように言われる。

普通、夫婦とその子供達からなる數口の家族が一つの所帯を構成して、生活の單位を造っていたが、生産の際には、このような家族が幾つか共同して農作業を行なつた。すなわち、父子、兄弟、或いは同族からなる大家族こそが、彼らの生産單位であつた。實際に、世宗の政治改革において、華北移住の女眞に土地が給與されたときに、戸或いは個人ではなくて、それ自身大家族を前提にする一定の口數が、給與の規準になつたことや、また有事の際の徵兵が、大家族を單位として行なわれたことも、大家族内部の緊密な關係を物語っている。

三上氏が指摘された大家族の共同耕作は、多數の勞働力が必要な女眞の農業構造によつて必然化されたと推測できる。これは、最近における考古學の輝かしい成果によつて裏附けられた。中國の東北地區からソ連のブリモリーエ南部にまで及ぶ廣大な地域にかけて、金代の女眞遺跡が點々と分布しているが、そこから、多數の農具が出土した。そのうちでもとりわけ、相當大型の犁先や撥土板が注目される^⑨。それを使用して作業をするためには、多數の勞働力が必要であつたことが考えられるからだ。この大家族の共同耕作は、一時的なものと言うよりも、むしろ恒常的な性格をもつていたとみなすべきであろう。その意味で、三上氏の考えられるように、この大家族の結合は緊密なものであつたと推測できる。この上で、今後は、様々な方面から、その歴史的性格を考察しなければならないが、當面、相續等の慣行から大家族内部の構成員相互の關係を追究することが、課題視されるのである。

小論中、諸先輩に對して、多くの失禮の言辭があつたことをおわびし、あわせて心より讀者諸兄の御叱正を乞ふ次第である。

註

- ① 研究史を概観するに當つて、和田清「我が國に於ける滿蒙史研究の發達」(『歴史教育』増刊號「明治以後に於ける歴史學の發達」七一・九、一九三二、後同氏「東亞史論叢」所收、東京一九四二)、三上次男「滿鮮地理歴史研究報告」を中心として見たる滿洲中世史の研究」(『歴史學研究』五一・二、一九三五)、百瀬弘「我國に於ける滿洲近世史研究の動向」(同上)、藤枝晃

『遼金』（『中國史學入門』上、京都、一九四七）、同『征服王朝』（大阪、一九四八）、外山軍治『日本における滿洲史研究』（『歴史教育』一五・一九・一〇、一九六七）等の文獻を参考にさせていた。詳しくは、これらを参照されたい。

- ② 内藤湖南『日本滿洲交通略説』（『叔山講演集』大阪、一九〇七、後同『東洋文化史研究』所收、東京、一九三六）、『昔の滿洲研究』（同上所收）参照。兩篇とも、最近、『内藤湖南全集』八（東京、一九六九）に再録された。

- ③ 南滿洲鐵道株式會社調査課『滿洲舊慣調査報告』前後兩篇（大連）が挙げられる。それには、『内務府官莊』（一九一四）、「皇産」（一九一五）等が含まれている。

- ④ Б. Я. Владимирцов, Общественный строй монголов Монгольский кочевой феодализм. Ленинград, 1934. 外務省調査部譯『蒙古社會制度史』（東京、一九三七）等がある例である。

- ⑤ 本文中に掲げたもの以外には、園田一鶴『明代建州女直史研究』（東京、一九四八）、同續篇（一九五三）、野上俊靜『遼金の佛教』（京都、一九五三）、和田清『東亞史研究（滿洲篇）』（東京、一九五五）、田村實造『中國征服王朝の研究中』（京都、一九七一）等もある。

- ⑥ 山田信夫『内陸アジア』（歴史學研究會編『歴史學の成果と課題』（東京、一九五〇）、「遊牧國家論批判—内陸アジア史序説に關して—」（『歴史學研究』二二・一九五七）等参照。
- ⑦ K. A. Wittfogel and Feng Chia-sheng, History of Chinese Society, Liao (907—1125), Philadelphia, 1949.

- ⑧ 村上正一『征服王朝』（『世界の歴史』6、東京、一九六二）一六五頁、吉田順一『北アジアの歴史的発展とウィットフォールの征服王朝理論』（『遊牧社會史探究』四六、一九七三）二、三頁等参照。

- ⑨ 三上次男『高句麗と渤海—その社會・文化の近親性—』（『末永先生古稀記念古代學論叢』吹田、一九六七）M. B. Воробьев, Два строения с каменами в Красноярской крепости в Приморье. Краткие сообщения Института археологии, Вып. 114, 1968; В. Д. Ленинков, Металлургия и металлообработка у чжурчженей в XII веке—По материалам исследований Шайгинского городища. Новосибирск, 1974 等参照。

- ⑩ 中國帝國、典型的中國王朝という譯語は、護雅夫氏の『若波講座世界歴史』9（東京、一九七〇）中の「内陸アジア世界の展開」總説から利用させていただいた。

- ⑪ K. A. Wittfogel, Probleme der chinesischen Wirtschaftsgeschichte. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. 57, 1927 新島 繁譯「支那經濟史の諸問題」（横川次郎譯編『支那經濟史研究』所收、東京、一九三五）Die Theorie der orientalischen Gesellschaft. Zeitschrift für Sozialforschung 7, 1938 森谷克巳譯「東洋的社會の理論」（同・平野義太郎譯編『東洋的社會の理論』所收、東京、一九三九）等参照。

- ⑫ K. A. Wittfogel 著、横山英譯「中國社會論—歴史的考察—」（『史學研究』七四、一九五九）参照。

- ⑬ 稻葉浩吉『滿洲民族に關する兩方面の觀察（上）』（『東

『亞經濟研究』一三—四、一九二九、一四—二、一九三〇）のうち特に（下）一七八頁、同「滿洲社會史の斷層」（『東亞』五一八、一九三二）等参照。

⑭ 一例を挙げると、旗田巍「建州三衛の戸口について」（『池内博士遷曆記念東洋史論叢、東京、一九四〇〕六七〇—六七三頁参照。

⑮ 島田正郎「洪皓の『松漠紀聞』に見える女眞の婚俗と金代婚姻法」（『法律論叢』三九—四・五・六、一九六六）六四七、六五五、六五六頁参照。

⑯ 黑龍江省博物館「金東北路界壕邊堡調査」（『考古』一九六一

—五）、同「黑龍江蘭西縣發現金代文物」（『考古』一九六二—一）、肇東縣博物館「黑龍江肇東縣八里城清理簡報」（『考古』一九六〇—二）、許明綱「旅大市發現金元時期文物」（『考古』一九六六—二）等参照。この外、當時使用された農具の種類を知るためには、註⑨で挙げたレーニコフ氏の著書と共に、黑龍江省博物館「哈爾濱東郊的遼、金遺址和墓葬」（『考古』一九六〇—四）、吉林省博物館輯安考古隊・輯安縣文物管理所「吉林輯安縣鍾家村發現金代文物」（『考古』一九六三—二）等が参考になる。